

日本会議 戦前回帰への情念

表題は山崎雅弘著「集英社新書」新刊。表紙カバー裏から一欧米メディアが「日本最大の右翼組織」と報じる日本会議。安倍政権の閣僚の半数以上が日本会議と直接的に繋がる議員団体に属するなか、日本の大手新聞・テレビは両者の関連性をほぼ報じてこなかった。本書では日本会議の「肉体、(人脈・組織)」と「精神、(戦前戦中を手本とする価値観)、教育や靖国をめぐるその「運動」を詳説し、日本会議と安倍政権が改憲へと傾倒する動機が、かつて日本を戦争に導いた国家神道を拠り所とする戦前回帰への道筋にあることを指摘。気鋭の歴史研究家が日本会議を近視眼的な「点」ではなく、史実をふまえた「線」としての文脈から読み解く、同組織の核心に触れるための必読書。



目次は次のとおり。はじめに一大河ドラマ『花燃ゆ』と日本会議の副会長、第1章 安倍政権と日本会議のつながり—占領された内閣、第2章 日本会議の「肉体」—人脈と組織の系譜、第3章 日本会議の「精神」—戦前・戦中を手本とする価値観、第4章 安倍政権が目指す方向性—教育・家族・歴史認識・靖国神社、第5章 日本会議はなぜ「日本国憲法」を憎むのか—改憲への情念。

日本会議の「肉体」と「精神」、安倍政権とのつながりなど、本書を読み進むと「戦前回帰の情念」という副題が心に迫ってくる。とりわけ自民党憲法改正草案と重ねてみると、恐ろしさすら感じる。紹介したいことは多いが、ここでは「安倍首相と日本会議はなぜ天皇の言葉を無視するのか」について触れておきたい。

これを読んで、はじめて宮内庁ホームページを閲覧した。平成21年(2009)4月8日の「天皇皇后両陛下御結婚満50年に際して」という宮殿石橋の間で行われた記者会見。宮内記者会代表質問の「問1」に対する天皇陛下の回答である。

「時代にふさわしい新たな皇室のありようについての質問ですが、私は即位以来、昭和天皇を始め、過去の天皇の歩んできた道に度々に思いを致し、また、日本国憲法にある「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」であるという規定に心を致しつつ、国民の期待にこたえられるよう願ってきました。象徴とはどうあるべきかということはいつも私の念頭を離れず、その望ましい在り方を求めて今日に至っています。なお大日本帝国憲法下の天皇の在り方と日本国憲法下の天皇の在り方を比べれば、日本国憲法下の天皇の在り方の方が天皇の長い歴史で見た場合、伝統的な天皇の在り方に沿うものと思います。」

天皇と安倍首相、日本会議との憲法への「思い」の違いは明確だ。これからも天皇の発言にも注目していきたい。「戦前回帰」を避けるために。 (2016年8月19日)